

生活の探究 ～ 暮らしを豊かにすること ～

1 研究の内容

(1) これまでの研究

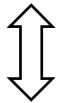
令和元年度から4年間、本部会では「生活の探究からあみ直しへ」を研究テーマとしてきた。これは、研究主題「学びをあむー新領域『てつがく創造活動』を中核とする教育課程の開発ー」を受けて設定されたものである。「学びをあむ」とは、自分の思いを大切に、様々な人・もの・こととのかかわりながら自己を更新し、新たなものを創り出していくことを指す。このことから本部会では、子どもたちに家庭科の学習を通して自分自身の生活を見つめなおし、学習したことを生かして主体的に行動し、自分なりのめあてに向かって柔軟に修正を繰り返しながら、新たなよりよい生活を創造していける力を育みたいと考え、研究に取り組んだ。そして、この“主体的に行動し、めあてに向かって柔軟に修正を繰り返し創造する姿”を、生活を「あみ直す」姿と捉え、4年間の実践の中で具現化してきた。そして、①にある表1のように家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキルを表す。

昨年度は、それらの研究を生かし、研究テーマを「生活の探究」とし、人・物・こととのかかわりの中で生活を見つめ、価値観を問い直していくこととそれを定義し、「学びをあむ」姿のその先には、探究を通して磨かれた感性をもとに主体的に生活することから、暮らしが豊かになると考え「暮らしを豊かにすること」を副題に設定している。

① 家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキル

本部会の研究テーマにある「生活の探究」は、これまでの研究を通して、自分の生活を立ち止まって省察することがその始まりであり、さらに友だちと交流することで、“よりよさ”への探究を導き、生活のあみ直しへとつながれると分かった。家庭科の学習を生活に生かすには、身につけた技や気づきを自分の生活と意識的に関連させて、相手のことを考えながら行動する必要がある。このような家庭科の学習過程そのものが、家庭科における「メタ認知スキル」を育む。また、実習の場面では、粘り強さや没頭すること、協力する態度等が求められ、これは「社会情意的スキル」の育成に繋がれる。このような「メタ認知スキル」と「社会情意的スキル」が、学習場面における主体的な学びを支えることを、表1「主体的な学びを支える力」として整理する。

表1 主体的な学びを支える力（メタ認知スキル、社会情意的スキル）

	メタ認知スキル	社会情意的スキル
個による 学びの場面  協働的な 学びの場面	<div>自分や自分の生活を改めて見つめ直し、課題を見出す</div> <div>学習したことをどのように生活に生かすか考え、実行する</div> <div>相手の反応を予想しながら活動する</div>	<div>粘り強くかかわり、最後まで取り組む</div> <div>没頭する・楽しむ</div> <div>みんなのために今、自分ができていることを考えて、実行する</div>

② 持続可能な社会に関する取り組み

本部会では、特にコロナ禍以降、積極的に持続可能な開発目標（SDGs）を題材に取り上げている。持続可能な社会について考えることは、現代的な課題として各教科で扱われるが、生活や行動を見つめ考える教科である家庭科との親和性は高く、家庭科が担う役割は大きい。また本部会では、それが「暮らしを豊かにすること」に繋がると考えている。また、子どもたちが判断のもととする感性や価値観を育むには、トピック的に取り上げるだけでなく、年間を通してくり返し意識づけを行いながらカリキュラ

ムを構成していくことが有効だと言える。フードドライブやフェアトレードチョコレートについては、附属高校生との交流授業を行い、共に学ぶ機会が得られた。継続的な取り組みから、持続可能な社会について考えることが、学校や教科の風土として根付きつつある。これは大きな成果と捉えられ、社会にもはたらきかける附属学校園全体の取り組みへと発展させる基盤とすることができるようになっている。

③ 食の感覚を豊かにするための「実験的な取り組み」

生活を科学的な見方・考え方で捉える力を育むだけでなく、暮らしを豊かにするために生活の中で意図や根拠をもって選択できる力を育むため、比較することを中心とした実験的な取り組みを取り入れる。

私たちの生活様式は、2000 年頃から“スローライフ”の概念が生まれる等、生産性や効率性ばかりに重きを置かない暮らし方が注目されるようになった。コロナ禍において、料理や製作等の手作りが流行し、時間を有意義に使う方法やコミュニケーションの手段としても広がったことにも繋がる。人々が、手間暇かける充実感や豊かさに気付き、時間の使い方を問い直し始めたと言えるだろう。その結果、自分の暮らしを見直し、暮らしの中に選択肢があることを知り、自ら考え判断し、能動的に生活することを目覚めた人が少なくないのではないだろうか。このような時代背景から、Well-being（ウェルビーイング）の概念も、各分野で浸透するまでになった。そこで本部会では、家庭科における実習や実験の中で、どのように仕上げたいかを子ども自身が考え、意図や根拠をもって決める姿を尊重する。実験的な取り組みにおいて、予想や観察をして実感を伴って理解を深める経験を積み、その価値観や感性を問い直し磨いていきたい。昨年度は、表 2 にあるような年間計画を立て、実験的な取り組みを行った。

表 2 年間計画（令和 5 年度 5 年生）〔記号：◇実験的な取り組み〕

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
家庭科オリエンテーション	調理オリエンテーション ①お茶をいれる◇A	ゆでる調理 ①ほうれん草のおひたし◇B ②ゆでいも◇C ③ゆで野菜スープ	裁縫（手縫い） ①おたまじゃくし ②きのこのマスコット	夏休みチャレンジ	裁縫（手縫い） ②きのこのマスコット ③針さしづくり 持続可能な社会 SDGs おいしいご飯を炊こう ①ピーカー炊飯 ②文化鍋→おにぎり アクション			整理整頓で快適に ①整理整頓チャレンジ ②整理整頓メソッド	みそ汁づくり ①基本のみそ汁 ②こだわりのみそ汁◇D	食品の組み合わせ ①栄養素とその働き ②食事の献立◇E SDGs	裁縫（ミシン） ①ミシンの使い方 ②台ふきん

A お茶をいれる

茶葉は、A 煎茶、B 深蒸し煎茶、C ほうじ茶、D 玄米茶、E 抹茶を用意し、見た目や香りを比較してから茶をいれる。湯の温度を変えて比べることも取り組むことができる。

B ほうれん草のおひたし

ほうれん草をゆでて「おひたし」を調理する。ゆで時間（加熱時間）を変えることや、水にとることをする／しないの違いを比べる。ゆで時間は教師が目安を示し、グループの話し合いで決定する。

C ゆでいも

ジャガイモを同時に鍋に入れ水からゆでて、時間差をつけて取り出し、比較をしながら試食する。ゆで時間（加熱時間）の具体は、教師が目安を示し、グループの話し合いで決定する。

D みそ（こだわりのみそ汁）

A 米みその赤、B 米みその白、C 麦みそ、D 豆みその 4 種類を用意し、見た目などの観察と試食をする。実との組み合わせや好みなどを考慮し、使用するみそを選ぶ。

E 米（食事の献立）

家庭のおかずに合わせてご飯とみそ汁の調理を計画する。A 新之助、B 青天の霹靂、C さがびより、D ミルキークィーンを、銘柄を伏せて提示し、炊飯前の様子を比較観察して試食する。

このように、本部会の研究では家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキルを明らかにしながら、持続可能な社会に向けた取り組みを行い、比較することを中心とした実験的な取り組みを意図

的に取り入れた実践研究を行ってきた。また、可能な部分は、本学の学生や附属学校園の生徒や園児と共に取り組むようにした。その結果、科学的な視点から食材の変化を改めて見つめたり、異年齢との交流による学びや気づきを得たりしながら、自分の生活に結びつけようとすることができた。

（２）今年度の研究

本校の児童は、その能力や置かれた環境に恵まれ、持続可能な社会を生きることも、SDGs についてもよく知っている。一方で、生活に不自由を感じ、限られた環境で工夫しようとする必要感はなく、生活を見直したり、具体的な行動を起こしたりする意識は高まりにくい。この状況では、持続可能な社会について考えることが、自分事にはなりにくいと考えられる。また、物事を自ら判断しようとする子が多く、考え方や行動規範を教師が提示したり、導こうとしたりすることは良い結果を招かないことが予想される。

そこで今年度は、持続可能な社会に関する具体的な取り組みを継続しながら、家庭科におけるプロジェクト型活動を取り入れる。

① 教科「家庭科」における“プロジェクト型活動”

本校では、「てつがく創造活動」の時間を中心に一部の他教科においても、個人やグループが選んだテーマに向かって探究する「プロジェクト型活動」を行っている。子どもたちはこの時間を楽しみにしていて、そのテーマは、自然、科学、交通、謎解き、演劇、スポーツ、工作、裁縫、料理など多岐に渡る。子どもたちは、テーマに基づいて活動し、中間発表や年度末に同学年や保護者、異学年などに活動を開く。そして本部会では今年度、家庭科におけるプロジェクト型活動への取り組みを始める。

② 持続可能な社会に関する取り組み

これまでに引き続き、フードドライブやおにぎりアクションに取り組んだり、他題材と関連を図りながら持続可能な社会について考えたりする機会を継続する。今年度のフードドライブ実施前には、本学の学生委員との交流授業を行い、回収された食品が自分たちの手を離れた後、どのように必要な方のところへ届くかや、本学のフードドライブの合言葉（心もち）を学ぶようにしている。

２ 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

（１）「家庭科」におけるプロジェクト型活動

① ねらいと概要

本校は、前述の「てつがく創造活動」に取り組み、「総合的な学習」の時間はそこに含まれる。プロジェクト型活動のテーマを家庭科に関連させ、一定の範囲内に納める目的で「持続可能な社会」と「家庭科」を２本柱と設定する。小学校２年間の家庭科のまとめとなる時期に、このプロジェクト型活動に取り組み、その考えや価値観を育み醸成していくことを目指す。

② 子どもの姿と教師のみとり

子どもたちが選んだテーマや活動内容は、１月初旬時点で表３のようにまとめられる。子ども自身が選んだものであり、２本柱を設定しても、家庭科の範囲を超えるものも含まれるのが現状である。しかし、自分の興味・関心に基づき探究的な取り組みを行う過程に価値があり、家庭科以外の時間も活用しながら学びを深めるよう支援していきたい。

表３ 家庭科におけるプロジェクト型活動 ６年２組 活動計画

PJ の柱		プロジェクトテーマ	活動内容
家庭科	持続…		
住	気候	二酸化炭素削減	No.13 のためにできる事を考える。自動販売機に付いている CO2 を吸収する素材を調べたり、実際に使って確かめたりする。
食	食料	食品ロス	普段は捨ててしまう食品を使って料理を作る。
世界	戦争	ウクライナ戦争とイスラエル戦争 核兵器について	戦争が起きる理由を考え、戦争をなくすためにはどのような努力が必要か、また核抑止力政策は本当に正義と言える政策か。
衣	環境	地球環境に優しく、作る時に高い 技術がいらない衣服	環境に良く、災害時に簡単な材料しかなくても作れる衣服の作り方を調べ、実際に作る。

食	食料環境他	サヴァ缶（復興支援、エシカル）料理	サヴァ缶と、食料自給率を上げる食品を使った料理。幼稚園生などの栄養バランスも考える。
食	食品ロス貧困	国産の食料を使った食品ロスにならない料理（コスパ、タイパ、栄養）	食品ロスにならない料理を考えて作る。栄養バランスも考慮し、子ども食堂のメニューの考案もしたい。
衣	環境	安全で世界の全員が着られる衣服	先進国の服の廃棄量とその対策を調べる。環境に配慮した最善な対策を考える。
世界	医療	世界の感染症	流行しているウィルスを調べ、まとめる。対処法を編み出す。
地域	交通	交通や発電を地域から次世代化する	交通や発電の次世代化について、現状をまとめ、最終的に自分で創発する。
衣	環境	環境に優しい衣服	衣服を作る過程の環境負荷を調べ、環境に配慮した服の繊維などを調べ、実際に作る。
地域	森林動物	生き物の生息範囲調査	お茶大の生き物生息範囲を調べ、まとめる。
住	エネルギー	自然を最大限に生かしたエコな家電や製品	再生可能エネルギーや自然エネルギーを活用についての再理解。エコな家電や製品を知りたい。
住	エネルギー	環境に優しいエネルギーと、それを最大限活用した家の間取り	採光の方法などについて模型などを通して理解し、再生可能エネルギーを活用できる間取りを考える。
世界	貧困	貧富の差によって起こる暮らしの違い	貧しい状況しか知らない人がいる一方で、富んだ暮らしをする人もいる状況を調べ、私の暮らしとも比べてできる事を考える。
世界	平和	戦争解決の手段	米大統領選が行われ、世界の政治が混乱している。現在の国連の機関をもう一度確認し、戦争を起こさない手段を考える。

（２）持続可能な社会に関する取り組み

フードドライブは6年生を中心に取り組み、実行委員を募って子どもたちの考えを反映させながら活動を進める。また6年生は、袋づくりの題材で防災リュックを製作し、災害を生活の視点から考えるようにする。おにぎりアクションは5年生を中心に炊飯の学習と関連を図りながら取り組む。おにぎりアクションの活動の輪を広げるために、小学生から本学や附属学校園の園児・生徒に呼びかける。

フードドライブ実行委員会は、回収した食品を本学SDGs推進研究所に届けた際、研究所内を見学したり、お話を伺ったりしたことがきっかけとなり、自分たちも「お茶小 SDGs 実行委員」と名前を変えて、より発展的・継続的な活動を展開したいという思いを抱くようになった。おにぎりアクションは授業で行わなかった6年生からも参加希望があった。持続可能な社会に対する課題が、少しずつ子どもたちにとって身近なものになっていることが感じられる。



【写真】実行委員会
研究所見学の様子

3 今後に向けて

子どもたちが生きる未来は、持続可能な社会について考え向き合うことが、一人ひとりにますます求められる。本校の子どもたちに限らないが、日本に住む子どもたちは、まだまだその課題を自分事として捉えるには距離のある生活をしていることが多い。本部会ではそのために、2年間の授業を通して食に関する感覚を豊かにすること、そこから自分の暮らしを見直し、自ら考え判断することを目指してきた。同時に、各題材と関連させたり、持続可能な社会に関する具体的な活動を取り入れたり、プロジェクト型活動に取り組んだりして、継続的に課題に触れるようなカリキュラムを構成してきた。

しかし、授業時間数が限られた家庭科の時間だけでは、その課題を網羅し解決することの限界を感じる。今後は、教科を超えて時間を確保することや、これまで以上に日常的に生活の中で意識され馴染むような働きかけや意識づけが求められるだろう。他教科をも視野に入れたカリキュラム・マネジメントをより一層検討していきたい。

（築地）